



ゆるふわっ！



パンティ田村

懐中電灯の丸い光が廊下を照らす。

廊下は古びた板で造られていて、足を前に進めるたびに『ぎい・・・ぎい・・・』と気味悪い音が鳴る。窓ガラスに叩きつける雨音と、喉が潰れたウグイスみたいな廊下の音だけが旧校舎に響いていた。

一瞬外が明るくなり、その直後に一斗缶で作った塔をぶち壊したかのような、雷鳴。

「きゃあああああああ！！！！」

光という予備動作がある雷鳴にはそこまで驚かなかったが、俺は菜摘の悲鳴に口から心臓が飛び出しそうになった。

「ちょ、お前。お前の声でビックリするからその絶叫やめろ」

「う、うるさいわね！あんたも男だったらこのくらいのことでビックリしてんじゃないわよ！」

菜摘が言い終わる前にまた雷鳴が轟いた。

「おお、だいぶ近いな」

「ぎゃあああああああ！！死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬう——！！！」

俺の腕を力いっぱい掴む菜摘。いてえ。

「落ち着けて」

「ア、アキラ、怖くないの？」

「いや、雷って自然現象だろ？雨とか風と一緒にだろ。ちょっと光って大きな音がするだけだ
って。」

「れ、冷静ね」

「あと、光った後にゴロゴローってくるから、光ったら音が鳴るもんだと思えばある程度は準備出来る。」

「な、なるほど・・・」

瞬間、光。

「来るぞっ！」

体をこわばらせて俺の腕を掴む菜摘。いや、だからいてえって。

だいぶ大きな雷だったが、菜摘は悲鳴を上げなかった。

「じゅ、準備できれば少しは違うわね。そうよね。大体自然現象ごときがこのあたしを脅かそうなんて100万年はや光った！」

「反応はやっ！順応はやっ！」

俺の韻を踏んだツッコミを無視して、もう菜摘は雷を克服したようで俺の腕を離して一人で先に進む。

「ほら！さっさと行くわよっ！ってほら光ったあ！！」

その瞬間。

菜摘の後ろに何かの影が見えた。気がした。あれは・・・女？

慌てて懐中電灯を影の方へ向ける。しかしそこには古びた掲示板があるだけだった。

「どうしたの？」

「いや、今人影が見えた、ような・・・」

「ちょ、ちょっとやめてよ！こんなところで言う冗談じゃないわよ！」

『・・・し・・・た・・・』

深い深い井戸の底から聞こえるような、くぐもった声。助けを求めるかのような、ねばつく声。

『・・・お・・・ま・・・し・・・よ・・・』

少し前を歩いていた菜摘だが、俺の所へ駆け寄り、顔を寄せて小声で言った。

「・・・アキラ・・・聞こえた・・・？」

「ああ。やっぱり誰か喋ってるな」

「・・・これ・・・ヤバイ。しゃれになんないわよ・・・」

見ると菜摘は小刻みに震えていた。少し涙目になってる。いや、この状況では男の俺でも怖い。すると、懐中電灯の光が消えた。

「ちょ、ちょっとアンタ！この状況でそんなこと・・・！！」

「ち、ちがっ！なんも押してないのに急に・・・」

その時、今までで一番大きな雷鳴が光と同時に鳴り響いた。そして俺たちの目に、女が映った。髪が長い、セーラー服を着た女。足は、無かった。

「ぎいやああああああああああああ！！！！！！！！！！」

「うおあおえああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

俺と菜摘は同時に回れ右をして全力疾走した。

「だから、あれは教師に折檻されて殺された女学生の霊に間違いないわ！」

夏休みの補習の後、俺と菜摘の周りには人だかりが出来ていた。

「うちの学校って昔は不良がたくさん居たらしいじゃない？だから武闘派の先生もたくさん居たらしいのよ。きっとその中で陰湿なドSの教師が目をつけた女生徒を・・・」

俺は竹ノ塚 明（たけのつか あきら）。高校1年。

自慢気に話しているショートカットの女は小菅 菜摘（こすげ なつみ）。家が隣で小中高とずーっと同じ学校に通っている幼なじみだ。と言っても世間で言うような色気のある関係になるわけはなく、ほとんど兄弟みたいなもんだ。

まあ、ふたりとも赤点補習を受けているということはそれなりの頭脳の持ち主だ。

昨夜、俺と菜摘は俺の家でバイオハザード（しかも一番怖い1作目）をプレイして居た所、『どちらがより怖がりか』という話になった。というか、ゾンビが出てくるたびにワーキヤー言う菜摘が、声を出して驚かない俺の事が気に入らなくてイチャモンを付けてきたというのが正しい。

そこで急遽、『ドキドキ！真夏の旧校舎心霊ツアー』が組まれたわけだ。結果は、まあ、見てはいけないものを見てしまった、というわけだ。

「ねえアキラ！あのおぞましい声！今思い出しても身震いするわよね！？」

「あー。そーだな。」

昨夜の学校からの帰り道でずっと泣き続けて、家に帰るのが怖いと言ってうちの姉と一緒に寝た奴がなんでこんなに元気に話すんだろう。気が抜けた。

菜摘を中心とした集団は『第二回！ドキドキ！真夏の旧校舎心霊ツアー～男女ペアでの大絶叫～』の話が盛り上がり出したので、俺は静かに教室を出た。

俺の足は旧校舎へと向かっていた。昨日の幽霊の正体を確かめるため、というわけではなく、どうやら財布を落としたらしい。他のものなら諦めもつくが、さすがに財布は諦めるわけにいかない。俺の名前が入ったカードとかも入ってるので、先生に発見されたら立ち入り禁止の旧校舎で何をやってたんだという話にもなる。

昼間の旧校舎は夜とはだいぶ様相が違って、古びた、味のある建物だ。日光に照らされた木造建築からは少しイイ匂いがする。たしか昨日はこの辺りで幽霊とあったような・・・

「竹ノ塚 明くん？」

やさしい声で名前を呼ばれた。

振り返ると、そこにはこの世のものとは思えない美少女が居た。陽の光を浴びてツヤツヤに光った綺麗な長い黒髪。白いというより、透き通るような肌。吸い込まれそうな大きな瞳。少し首をかしげてニコリと笑う。かなり細めで、セーラー服からすらっと伸びた手。すらっと伸びた足。が、無い。

「・・・！！！」

悲鳴を上げそうになるのをなんとかこらえる。この世のものとは思えない美少女だが、この世のものではないとは！

「昨日は驚かせてしまっておめんなさい・・・落とし物を拾ってあげただけど、あの、あたし、恥ずかしくてあまりハキハキと話が出来なくて・・・」

見ると、女の子は顔を真赤にして俺の財布を持っている。透き通るような肌も、よく見たら透けてる。

「それで、ごめんなさい、悪いとは思ったけど中身を見させてもらったの。それで、名前を。住所もわかったんだけど、届けようにもあたし地縛霊だから・・・」

地縛霊って言っちゃった！この子自分で霊って言っちゃった！！

しかし見れば見るほどかわいい普通の女の子だ。霊じゃなければ。俺はもうだいぶ落ち着いたので、財布を受け取った。

「いや、あの、保管しておいてくれてありがとう。というか、霊って昼間出ていいの？」

「？ダメなんですか？」

きょとんとした顔で俺のことを見つめる女の子（の幽霊）。ゆるい子だなー。

「まあ、いいけど。地縛霊っていつもここにいるの？」

「はい。いつからかっていうのは覚えてないんですけど、気がついたらずっとこの旧校舎に居たんですよ。」

「あ、そういうの覚えてないんだ。」

ちょっと透けていて足が無い以外は普通のかわいい女の子だ。俺の恐怖心はなくなり、かわりに好奇心が顔を出してきた。

「まあ、立ち話もなんだし、教室入ろうか。」

俺は教室に入り、倒れている椅子を起こして座った。

「それで、えーっと、名前はなんていうの？」

「梅島 ちふゆって言います。歳は16歳です。」

「あ、そうなんだ。じゃあタメじゃん。」

「って言っても、もう何十年もここに居ますけど。」

「まあ、そうだよな。」

どうやら幽霊というのは年を取らないらしい。ここは敬語を使うべきか？と思ったけど、なんとか、今更感があるのでやめた。

「梅島さんはそれで、普段はなにしてんの？」

「普段・・・ですか？」

「んー」と言いながら唇に人差し指を当てて、右斜め上を見る梅島さん。仕草がちょっと古いかもな。

「昼間はここから校庭を眺めて、みなさんの体育の授業とか、部活とかを見えています。」

「へー。夜は？」

「夜は寝てます。」

「寝るのかよ！！」

つい渾身のツッコミが出てしまった。それを見て梅島さんはキャッキヤと笑う。

「幽霊も普通に笑うとかわいいんだね。」

俺がそう言うと、梅島さんは顔を真っ赤にして、うつむいてしまった。

やばい。傷つけるような事を言ったか。

「ご、ごめん。つい。その、俺・・・」

「あ、ち、違うんです・・・その、あたし、嬉しいんです・・・」

「え？」

「あたし、ずっとみなさんの事見てるばかりで、誰もあたしに気付いてくれなくて。こんな、何十年ぶりに人とお話が出来て、あたし、本当に嬉しいんです・・・」

俺の方を見て、微笑む梅島さん。相当かわいい。でも、何十年も一人でこんな所に居たなんて、相当寂しかっただろう。俺だったら死んでるな。いや、死んでるんだらうけど。そんな事を考えていたら梅島さんが小声でつぶやいた。

「しかも、かわいいだなんて・・・」

「え？」

「いえ、なんでもありません・・・」

その時、教室のドアがガラッ音を立ててと開いた。そこには菜摘と数名のクラスメイトが立っていた。

翌日の補習では、俺の周りの席には誰一人として近寄ってこなかった。遠巻きに「竹ノ塚は憑かれてる・・・」「虚空に向かって笑顔で話してた・・・」「近寄ると呪いに巻き込まれる可能性があるぞ・・・」なんて声が聞こえてくる。

昨日の放課後、俺は（幽霊の）梅島さんと旧校舎で話している所を目撃された。というか、どうやらクラスメイトには梅島さんの姿は見えないらしく、俺が説明すればするほどクラスメイトはじりじりと距離を離し、ついには走って逃げ出した。

梅島さんは突然たくさんの方が来たので逃げて（消えて？）しまったが、菜摘には姿が見えたらしく、一緒に帰っている間またずっと泣いていた。

「や・・・だ・・・グス・・・あんな幽霊・・・アキ・・・楽しそ・・・グス・・・いや・・・」

全然何言ってるのかわからなかったが、どうやら菜摘も俺が取り憑かれたと思ったようだ。俺も一応気になったので鏡をよく見て頬がこけてないか、体重は減ってないか。食欲がなくなっていないかなど、注意深く自己観察をしたが、特に影響はないらしい。逆に菜摘が参ってしまって、今日は熱を出して補習を休んだ。

そして俺はまた、旧校舎に来てしまった。

昨日、突然クラスメイトが驚かせてしまった事を謝りたいし、なにより「久しぶりに人と話が出来て嬉しい」と言った梅島さんのあの微笑みが忘れられなかった。あの子は、何十年も、ひとりで。少しくらい、話し相手になってあげたい。

昨日の教室に行くと、梅島さんは外を見ていた。

「よっ」

声をかけると梅島さんはビクツとして振り返り、泣きそうな顔をした。

「もう・・・来てくれないと思ってました・・・あたし・・・ごめんなさい・・・」

「いやいやいや。謝るのはこっちだって。あいつらも悪い奴らじゃないんだけど、まあ、その、怖がりというか、その、ね？」

「はい・・・そうですよね・・・」

「まあ、気にしないでよ。俺、もうちょっと梅島さんと話たくて来たんだ。」

俺がそういうと梅島さんは真っ赤になって下を向いた。スカートのすそをいじってみたり、ネクタイを触ったりして、もじもじしている。

「あの・・・その・・・」

「ん？どうしたの？」

「あの・・・ひょ、ひょっとして・・・あたしたち、噂になってるんじゃ・・・？」

その瞬間、教室の入口から大声が聞こえた。

「そういう『噂になってる』じゃないっつーの！！！」

振り返るとそこには菜摘がいた。

～続かない～